

第31回

非正規雇用とSDGs

行方市SDGs推進アドバイザー・茨城大学教授 野田 真里

1. 非正規雇用の推移

非正規雇用は日本では大きな問題となっており、今や全雇用の4割弱、女性に至っては半分以上となっています。非正規雇用にはパート、アルバイト、派遣社員、嘱託等が含まれます。以下、非正規雇用と賃金、男女格差に着目してみましょう。

まず、正規雇用と非正規雇用の過去30年間の推移について見てみましょう（令和2年版『厚生労働白書』）。雇用に占める非正規雇用の割合が、1989年の19.1%から2019年には38.3%と、約2倍に増えてい

ます。男女別で見ると、非正規雇用の割合が1989年に男性8.7%、女性36.0%であったものが、2019年には男性22.9%、女性56.0%となっており、差があります。

2. 非正規雇用と賃金

次に、非正規雇用と賃金について

考えてみましょう（厚生労働省「非正規雇用の現状と課題」）。短期雇用でない一般労働者について、2022年の時給ベースで見

た場合、正社員・正職員の平均賃金が1976円であるのに対し、非正規の場合は1375円と約600円の差があります。さらに、55歳～59歳の年齢層で見ると、正社員・正職員が2387円であるのに対し、非正規は1338円と約1000円の大きな差があります。上述の通り非正規雇用の割合が増えている中で、非正規は正規よりも賃金が高いので、全体としての賃金の上昇は困難と言えるでしょう。

SDGs目標8「適切な雇用と経済成長」のターゲット8.5「同一労働同一賃金」を測る上での指標は「労働者の平均時給（性別、年齢、職業、障害者別）（外務省「SDGsグローバル指標」）となっています。性別で見ると、日本は2010年が男性1978円、

女性1396円（全体1795円）に対し、2020年には男性2019円、女性1565円（全体1863円）と格差が拡大しています。

3. 非正規雇用の格差と特徴

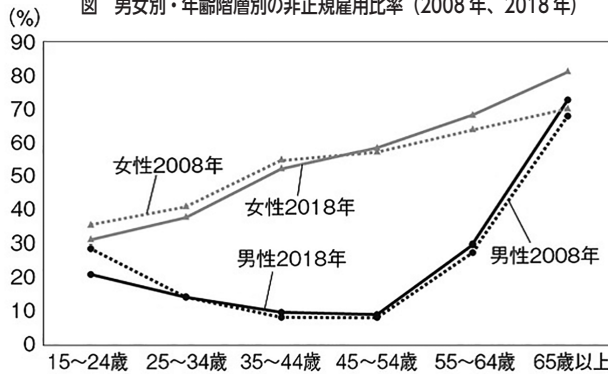
非正規雇用のパターンについては、男女で違いがあります（権丈2020）。日本の非正規雇用の割合と年齢をしてみると「胃袋型」という特徴があります（図）。男性は、若年層と高年齢層が高く、中年層が低くなっています。これに対し、女性は年齢に伴い上昇しています。国際比較で見ると、こうした非正規雇用の男女差は日本に特徴的とされます。欧米では女性の非正規雇用のパターンは男性に近く、全年齢の非正規雇用比率も男女で大差はないとされます。

最後に、関連で世界経済フォーラムのジェンダー・ギャップ指数を見ると、日本の経済分野（雇用を含む）の男女格差が目立ちます（WEF2022）。2022年の日本の総合順位は、146カ国中116位となっており、先進国の中で最も低い水準です。ジェンダー・ギャップ指数は4つの分野

に分かれています。日本は教育1位、健康63位と上位であるのに対し、経済121位、政治139位となっています。経済分野の男女格差について詳しく見てみると、労働参加率83位、同一労働の賃金格差76位、推定所得100位、管理職等130位となっています。

【訂正】本連載第29回3.4行目の目標4は誤植で、正しくは目標5です。

図 男女別・年齢階層別の非正規雇用比率（2008年、2018年）



出典：権丈（2020）